

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370525

研究課題名(和文)新潟県北部言語接触地域における方言音声の動態 10年前の全区画調査との比較

研究課題名(英文)The Dynamics of Dialect Speech in the Language Contact Region of Northern Niigata: A Comparison with a Survey of the Entire Area 10 Years Ago

研究代表者

大橋 純一(OHASHI, Junichi)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：20337273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：新潟県北部は東北方言との境界線上に位置するが、より詳細には1)阿賀野川流域を境にそれ以北と以南とで対立するものと、2)以北内の地域がさらに北奥方言と南奥方言で対立するものがある。本研究では、それらより、特に衰退が著しい1)ガ行入り渡り鼻音、2)狭母音音節の中舌化を考察対象に据え、各動態を約10年前に実施した全区画調査との比較を通して追究した。その結果、1)に関しては全域的に現象の痕跡が確実であること、しかしその現れ方は不安定であり、音節による差も大きいこと、2)に関しては全域的に中古化の衰退が急速である一方、低母音化の維持やウ寄りの中古化の動きがみとめられることなどが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The northern part of Niigata forms the boundary area in contact with the Tohoku dialect. Specifically, it refers to 1) a situation in which the Tohoku dialect to the north of, and Echigo dialect to the south of, the Agano River basin are contrasted, and 2) another situation in which dialects to the north of the Agano River basin are divided into contrastive Hokuou and Nanou dialects. In this study, it is aspects such as the 1) on-glide nasal [g] sounds, and 2) the centralization of the closed vowel syllables, respectively, that are in more significant decline. Results revealed the following: (a) With respect to 1) vestiges of the nasal sound were recognized in the entire area, but its appearance is unstable, the variation depending on the syllable is significant. (b) With respect to 2) there is a rapid decline of centralization in the entire area. On the other hand, there is the trend of maintaining low vowelization and the development towards a central sound newly leaning towards /-u/.

研究分野：日本語学

キーワード：新潟県北部 言語接触地域 方言音声の動態 実相と分布 経年比較

1. 研究開始当初の背景

(1) 新潟県北部は、従来の方言区画論でも東北方言と位置づけられる場合があるように、隣接する他県方言との過渡的な性質を有する。また、それは単に東北方言との接触を意味するにとどまらず、北は山形県庄内を中心とする北奥方言系の言語と、東は福島県会津を中心とする南奥方言系の言語と接している。さらに南には大河阿賀野川・信濃川があり、それ以南の言語とも大きく性格を異にしている。すなわち当地域は、県北の限られた地域にありながら、まずは北奥・南奥という異なる二大東北方言域に接し、さらに河川を挟んでそれ以南の方言域とも接するという、言語地理上、きわめて興味深い方言地質を有するのである。

(2) そのような地域を問題にする場合、まずひとつには、そこでの言語実態が純粋にどのようなものであるのかが注目される。またひとつには、各接触域言語の当地域への影響、優劣の度合い、それに伴う言語変容等の動態が注目される。いわゆる言語接触地域ならではの興味、そういう地域であるからこそその課題がそこにはある。

(3) 上記のような問題意識を踏まえ、筆者は既に2003年に、当地域の全区画を対象とする音声の実地調査を行っている。またその成果の一部を『社会言語科学第7巻第1号』(2004年)、『音声言語研究のパラダイム』(和泉書院2005年)で明らかにしている。この調査以来、約10年の歳月が経過した(本研究課題の申請時)。現象の衰退が著しい当地域においては、既調査の蓄積を生かしながら、それと同様の調査を実施し、経年比較を行うことで、音声変化の実相により有効に迫りうるものと考えられる。本研究は、そうした学術的背景を念頭に推進するものである。

2. 研究の目的

(1) 新潟県北部は、主に東北方言と接して境界地域を形成するが、より詳細には阿賀野川流域を境にそれ以北(東北方言)と以南(越後方言)で対立するものと、以北内の地域がさらに北奥方言と南奥方言で対立するものがある。本研究では、その対立を象徴的に示す音声事象、中でも衰退が著しく、調査に急を要する次の二課題に焦点を絞って追究を行う。

ガ行入り渡り鼻音の実相と分布の変容：
[ɸg]の[p]化ないし[g]化に関する通時的な変遷の究明

狭母音音節/-i/ /-u/の実相と分布の変容：
北奥・南奥方言の通時的な関係性の究明

(2) については、既に『日本言語地図1』(1966年)の分布などからもうかがえるよう

に、東日本でまとまった痕跡が見られるのは当地域のみである。それは、ひとつには、この地域が東北方言的な[p]の地域と越後方言的な[g]の地域とが接する特殊な地理環境にあることと無縁ではないものと思われる。そうした両地域の干渉の中で、残存する[ɸg]が地理的・年代的にどのように展開しているのか、またそれが[ɸg]の通時的な変遷とどう結びつくのかを明らかにする。

(3) については、北奥・南奥方言の特徴的事象(シチジに合一・スツズに合一)が当地域の中北部で対立し、互いの勢力を張り出し合う関係にあることが既に10年前の調査で明らかになっている。これらがそれ以降、どういった実相上の変容をきたし、分布の対立においてどのような伸縮の実態にあるのかを、今回行う調査から追跡する。またそこでの究明事項を踏まえ、各方言の変化の方向性を明らかにするとともに、従来の北奥・南奥方言の区画を検証する。

3. 研究の方法

(1) 調査は、2014年5月~2016年9月にかけて、代表2地点に関する多人数調査と周辺地点に関する3世代調査の2つに分けて実施した。約10年前の調査(以下、前調査)では、当時の行政区画から高年層各1名を対象とし、大きく実相と分布の概要を捉える調査を行っている。本調査では、それらの究明点を踏まえ、まずは基礎的な調査を集中して行い、そこで得た知見に照らして発展的な調査を行うことで、課題とする各音声事象の地理的・年代的な動態を探ろうとした。

(2) 調査は、前調査時の音韻項目をベースに加除修正して調査票を作成、質問調査し、得られた回答内容をいずれも無圧縮のICレコーダーに採録した(必要に応じ、一部、デジタルビデオにも採録した)。同時に自然談話も採録し、発音結果に調査法による差がないかも検証できるようにした。

(3) 以上の追究にあたっては、これまでの聴覚を中心とする分析に加え、音響分析や口形分析といった視覚的な分析を積極的に志向した。特に2-(3)の事象に関しては、前調査により、従来の関心事であった中舌性に加え、口唇の弛緩や円唇~非円唇の度合いなど、実際音と連動して現れる口形上の特徴にも注視すべき要素のあることが示唆されている。そうした事実を踏まえ、上記の課題をより実態に即して、客観的に究明することを研究全体の指針とする。

(4) それらを推進するにあたっては、前調査との比較の観点から、音響分析には「音声録聞見」、口形分析には「Video Studio」の各ソフトを使用した。具体的には「方言の研

究1』(2015年)に報告した合拗音や八行唇音の分析手法を援用することとした。

4. 研究成果

以下、主に代表2地点の調査結果に基づき、「ガ行入り渡り鼻音」:(1)~(6)、「狭母音音節」:(7)~(13)の順で成果を記し、その意義や課題を(14)~(16)で総括する。

(1)新潟県北部の語中/g/には現在、入り渡り鼻音[ɲg]、小入り渡り鼻音^u[ɲg]、破裂音[g]の諸相がみとめられる。つまり程度の差はあるものの、着眼する入り渡り系の鼻音が確実に残存すること、一方で、前調査ではと対立してバリエーションの一翼を担った鼻濁音[b]が皆無であることがわかる(以下、便宜的に[ɲg]と^u[ɲg]は区別せず、[ɲg]に統一して表記する)。

(2)本調査では、発音に揺れのあることを念頭に、全語3回以上の発音を求めている。それによれば、現れる実相こそ上記の~であるが、その実状は[ɲg]もしくは[g]が一貫して発音されるものと、[ɲg]と[g]がランダムに発音されて一定しないものとで性質を異にする。そこで以下には、各個人・各語の発音で、すべて[ɲg]に現れたものをA、[g]に現れたものをC、[ɲg]と[g]のいずれにも現れたものをBとし、その各々の出現の割合を代表2地点に即して世代別に見比べてみる。なおその際、どの個人がどの語においてA~Cなのかの詳細は問わない。あくまで世代ごとの実態をトータルで見て、その割合を対比するものとする。

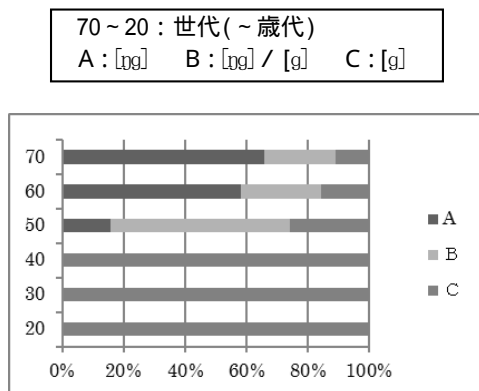


図1 典型地点(朝日村)

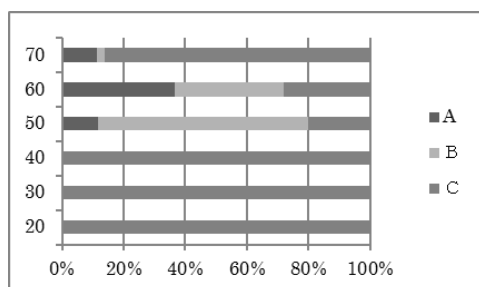


図2 曖昧地点(加治川村)

(3)3-(1)に記したとおり、本調査では、まず基礎となる代表2地点を対象とし、世代別の多人数調査を行っている。すなわち、前調査時に[ɲg]の痕跡が典型的にみとめられた地点(図1 典型地点:朝日村)とその現れ方に揺れがみとめられた地点(図2 曖昧地点:加治川村)の2地点である。以下、それらの実態を対比的に見ると、それぞれ次のような点が指摘される。

朝日村では70・60代において突出してAの出現割合が高い。そのAは50代になると大幅減の様相を呈するが、その目減り分はBの台頭によって相殺される。一方、40代以下には、Aはもとより、前世代に台頭したBの痕跡もみとめられず、おおよそこの世代を境に当地点の[ɲg]をめぐる様相は一変したことがうかがえる。つまり朝日村の[ɲg]の実態は、基本的には世代を降ってA~Bへと漸減していく性質のものであること、しかしそれも40代で断絶し、ここを転換点としてCへと一変していく動きであることがわかる。

一方、加治川村を見ると、40代以下で一律にCが現れる事態は上記と同じであるが、70~50代にかけての実態が朝日村とは著しく異なる。まず当地点で特徴的なのが、最上位世代の70代においてAとBの出現割合が大きく減退することである。しかし続く60代でその割合は一気に振り戻され、(Bが主体ではあるが)50代になるとさらにその動きが伸長することとなっている。つまり当地点の場合、全般に世代的な動向が一定しないばかりでなく、降順で見ればむしろ逆行的でさえある。

しかしそうした加治川村の動向も、同地点の60・50代(中でもBに現れるもの)の実態を細かく見ると、次のような点で合点がいく。つまり当世代で実際に[ɲg]に現れるのが、ほぼ最終回の発音に限られるという点である。調査では、基本2回以上の発音の後、内省を聞き、再度発音を求める形をとっている。よって性質上、最終回の発音がより自覚的知識に沿ったそれとなりがちである。当地点・当世代の[ɲg]は、主にそうした条件下で現れるのであり、上位世代で減退しつつあったAやBが再浮上する理屈もまさにその点にあると言える。

これらからすると、当該の話者に日常的な[ɲg]の発音習慣はないものと思われ、内省を問われてはじめてその存在が自覚される(しかし自覚的である分、ひとたび内省が問われれば[ɲg]の発音で徹底する)といった、いわゆる知識段階にあることがうかがえる。よってパーセンテージの上では[ɲg]の痕跡の程度差にも見える朝日村と加治川村であるが、その実状は各々性質を異にするものと受け取れる。

(4) 次に周辺地点の動態について、まず大きく結論めいたことをいえば、前調査以来、[ɸg]は対象域全体で急速に衰退していく状況にはない。前調査時と同様、/gi/や/gu/が口蓋化するのに伴い、当該の2音節が際立って[g]に現れがちな傾向も指摘されなくはないが、それ以外の音節に限って見れば、むしろ多くの地点で何らかの[ɸg]の痕跡がある。また70~50代にかけて[g]の端緒があり、40代を境にそれへと一変していく事態は、先の代表2地点と同様、どの地点にもおおよそ共通する動きとみとめられる。そうした点では、この[ɸg]の痕跡は、地域の広範にわたり、今後も一定程度維持されていくことが確実と思われる。

(5) ただし、以上の実態を地理的な連続性の面から見ると、必ずしも上記する代表2地点(典型地点:朝日村/曖昧地点:加治川村)の周辺に、各々それに類するタイプが同様に分布しているとは限らない。よって[ɸg]の消長は、各々の代表地点を軸に、それらから連続・派生して生じていくばかりではなく、変化の原理や序列の面では性格を同じくしながらも、むしろその対象域内において、各地点がそれぞれの歩みの中で遅速し、自らの実態を個別に結果させている面が大きいものと見られる。

(6) また一方、各接触方言で対立し、それぞれに影響力を持つかに見えた[g]と[b]であるが、前調査段階で[g]であった地点は本調査でも例外なく[g]である反面、[b]であった地点で現状もそうである地点は管見の限りでは確認されていない。つまりそのすべては[g]に現れるものであり、従前からの[b]の地点は、その鼻音要素を維持することも、また当然ながら渡り的な[ɸg]に転訛することもなく、かつて東京その他の方言がそうであったのと同様、徹底した破裂音化の道を共通に辿りつつあることがうかがえる。

(7) 次に狭母音音節/-i/ /-u/に関して、実相のバリエーションと各音節の統合の有無を確認すると、まず前調査では、次の2種6タイプのもものが抽出されている。

/-i/ /-u/を統合して発音

- 1) -i寄りに統合
- 2) -u寄りに統合
- 3) その中間相に統合
- 4) 特定音節を統合

/-i/ /-u/を区別して発音

- 1) 中舌化
- 2) 非中舌化

(8) これと対比すると、本調査では -1)と -4)はまったく、 -2)や -3)も目立ってはみとめられず、結果として のタイプが大勢を占めることとなっている。つまり大局的に見て、当該音節が中舌・合一化する

る現象は衰退が急速である。

(9) ただし以上のうち、70・60代に限ると、この世代には -2)やわずかながらも -3)がみとめられるほか、 -1)であってもやや-u寄り(または中間寄り)となって現れるなど、 の諸相と必ずしも断絶的ではない様相が見てとれる。これらのことからすると、当地域で純粋に従前からの方言的要素を辿れるのは上位世代の一部にほぼ限られること、またその実相も中間~-u寄りのものにはほぼ限られることがわかる。

(10) それらを分布の上から見ると、対象域全体で -1)~-2)が分散して現れるのを基調とする中、 -2)や -3)がさしたる地理的連続性をうかがわせることもなく、同じく対象域全体に分散する形で現れることがある(それは前調査で-i寄りとなって現れた地点でも同様である)。その点では、当地域の現状は、衰退する全体的な動きの中でも特に北奥方言系のものが著しいこと、またそれと関連して、前調査で勢力を張り出し合う状況にあった北奥方言と南奥方言の関係性に関して、より後者の方が優勢となっていることも指摘できる。

(11) 他方、特に -1)に関することであるが、 -2)や -3)に比べると、確かにその中舌性や合一化(つまり舌の前後関係)の点で差は大きいと言えるが、それを低母音化(つまり舌の高低関係)の面から見ると、さほど差を示さないというものが少なくない。またその傾向は -2)にもみとめられる場合があり、 -1)ほどではないながら、聴覚的にはやや中舌がかかって聞こえることにも注意がいる。以上は、当地域の/-i/と/-u/の実相が舌の前後の関係を軸に衰退するばかりでなく、高低の関係とも連動して推移しつつあることを示唆している。

(12) しかし一方、世代差の観点から見ると、特に50・40代といった世代に上記するような低母音化の事態は目立ってはみとめられない。また一部ではあるが、むしろ広母音的であり、かつ上位世代以上に徹底した中舌音を示すものが現れる場合がある(さらに口形の側面から見ると、比較的円唇化して現れることもその特徴である)。ただしそれは、残存する方言音声の質的バリエーションを考察した大橋純一(2017)の「疑似的実相」に相当するものと思われ、いわゆる知識段階に特徴的に現れる、衰退過程の一段階と解される。

(13) これらを総合するならば、狭母音音節/-i/ /-u/の実相と分布の現状は、基本的には中舌・合一化の急速な衰退化の動きと捉えられること、その中でも特に-i寄りとなる北奥方言系の衰退が著しいこと、一方で一部低母音化の維持や-u寄りへの実相変化を示す

ものがあること、また 50・40 代あたりに疑似的な中舌音を示すものがあることなどが指摘される。

(14) 以上を総括し、研究全体の学術的特色とその意義をまとめれば、おおよそ次のような点があげられる。

本研究が、言語の動態を見る上で格好のフィールドとなる言語接触地域、その中でも特に複数の言語特質が交錯し、多様な分布相を形成している新潟県北部地域を対象として考察していること。

そのような地理的条件を背景として、全国的にもほとんど類例のない、もはや当地域でなければ究明がかなわない稀少な音声事象の動態を明らかにしようとしていること。

聴覚を主体としてきたこれまでの研究に、音響分析や口形分析といった新視点からの知見を加えることにより、上記の課題を客観的に明らかにしようとしていること。

10 年前に行った全区画調査の成果を生かしながら、それと同規模の調査を実施することで、2-(1) に記す課題をより実証的に、また経年比較的に明らかにしようとしていること。

(15) これらにより、当地域の言語動態が既調査の恩恵も含めて多様な側面から追究されることになり、それぞれ当節の(1)~(13) に記すような知見が明らかになった。

(16) 以上のとおり、本研究を通して着眼する音声事象の痕跡や動態はある程度明らかになった。しかし反面、それらが各々衰退過程の段階的な諸相を示すものと判断されること、しかもそれを内的変化の括りで見通せるのは上位世代までであり、40 代あたりを境に別段階へと一変していく動きと捉えられること、それはたとえば一律の共通語化であったり、疑似的ないしは知識段階としての残存であったりすることも同時に明らかになった。既述のとおり、ここに対象とするのは地理的な特殊事情を背景に、今や全国的にもほとんど類例のみとめられない稀少な音声事象である。本研究で得られた知見を基礎として、その詳細を追跡的に見ていくことが今後の課題となる。

<引用文献>

- 大橋純一，口唇の特徴から見た東北方言の合拗音の諸相 八行唇音との比較を通して，方言の研究 1，ひつじ書房，5-27 頁，2015，査読有
- 大橋純一，言語接触地域における /-i/ /-u/ の実相と分布 新潟県北部方言の場合，音声言語研究のパラダイム，和泉書院，39-54 頁，2007 年，査読有
- 大橋純一，新潟県阿賀北地域における語中・尾行音，社会言語科学，第 7 巻第 1

号，30-40 頁，2004 年，査読有
国立国語研究所，日本言語地図 1，大蔵省印刷局，1966 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大橋純一，新潟県北部に残存するガ行入り渡り鼻音の実相と分布 代表 2 地点の世代別調査による経年比較，空間と時間の中の方言，朝倉書店，222-251 頁，2017 年，査読有

大橋純一，残存する方言音声の質的バリエーション 典型から知識レベルの実相まで，秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学，第 72 号，21-30 頁，2017 年，査読無

大橋純一，新潟県北部言語接触地域における方言音声の経年比較 1 高年層話者のガ行入り渡り鼻音の実態に即して，秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学，第 70 号，29-37 頁，2015 年，査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

大橋純一，方言音声の追跡調査 新潟県北部のガ行入り渡り鼻音について，言語地理学フォーラム，2015 年 6 月，国立国語研究所（東京都立川市緑町）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大橋 純一 (OHASHI, JUNICHI)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：20337273